

聖書：ヤコブ 2：14～19

説教題：行いのない信仰？

日時：2017年9月10日（朝拝）

ヤコブの手紙2章後半に入ります。ここはこの手紙の中心的な部分です。ここでヤコブは「信仰」と「行い」の関係について述べています。彼はこの手紙を主を信じるクリスチャンたちに書きました。2章1節に「私の兄弟たち。あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから」とある通りです。しかしその彼らにえこひいきの問題があったようです。経済的に富んでいる人々を重んじ、逆に貧しい人々を軽んじる。2～3節に記されていたように、金の指輪をはめ、立派な服装をした人が会堂に入って来ると、「さあ、あなたはこちらの良い席にお座りください」と案内する一方、貧しい人が入って来ると「あなたはそこで立っていなさい。座りたいなら、私の足元に座りなさい」と言う。このような差別はイエス・キリストへの信仰と一致しない、それと矛盾しているとヤコブは語っています。今日見る言葉はその話の続きです。

まずヤコブは14節で「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立ちましょう」と言います。彼が言いたいのは、行いがない信仰は何の役にも立たないということです。どういう意味で「役に立たない」と言っているかは続く言葉を見ると分かります。「そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。」すなわちその人の「救い」に役立つのかということです。前回最後の13節では最後のさばきの日のことが語られました。あわれみを示したことのない者に対するさばきはあわれみのないさばきであると。最後のさばきの日は、私たちが最もあわれみを必要とする日です。私たちの地上の行いが全部調べられ、明るみに引き出されて、評価される日です。そのさばきの日に、あなたの信仰はあなたを救うものか、そういう意味で役に立つ信仰であるかということです。

このことを分かりやすく説明するため、ヤコブは次の15～16節で一つのたとえを語ります。ここに生活にとっても困っている兄弟あるいは姉妹が出てきます。まず着るものがない。とりあえず今、着ているものはあるが、その替えがない。どう見ても生活に困っていることが一目見て分かる人です。その人は毎日の食べ物にも事欠いているでしょう。そういう人が兄弟姉妹の中にいたら、あなたはどうするのか。ある人は祝福の言葉

を口にするかもしれません。「安心して行きなさい。」という言葉は、直訳すれば「平和のうちに行きなさい」という言葉です。「平和」という言葉はヘブル語のシャロームに当たり、ユダヤ人が挨拶に使う言葉です。あなたに神の祝福があるように！ということです。その祝福の言葉をもう少し具体的にこの状況に当てはめたのが次に続く「暖かになり、十分に食べなさい。」という言葉です。その人は貧しい人にこう言っているわけです。「そんな格好をしていたら風邪でもひいてしまいますから、何か着るものを手に入れて、栄養がつくものでも食べなさいよ。それじゃ、またお元気で！」 一見この言葉は信心深い言葉に聞こえます。相手の益を願っています。しかしこのような言葉を発しても、目の前で困っている人に何も与えないなら、それは何の役に立つだろうかと言葉は言います。本人は何か良いことを言ったつもりかもしれない。しかし実際には困っている人に何もたらさない。表面上敬虔そうに見えても、それは役に立たないものだということです。

ここで「役に立たない」という言葉は第一義的には困っている人に対して役に立たないという意味で使われていますが、14節からの流れで考えれば同時にそれはこの言葉を語った人に対して「役に立たない」という意味も含んでいるかもしれません。困っている人を見ながら何の助けもしなかった人に対して、主はやがてのさばきの日にこう言われるとマタイの福音書 25 章 41～43 節に記されています。「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。」 この人がやがての日に分かることは、自分が持っていた信仰は自分の救いに役に立たなかったということ。それは役に立たない信仰だったので他の人に対しても役に立たなかったし、自分の救いが決定的に決まる日にも役に立たない。ヤコブは 17 節で、そのような信仰は死んだものだと言っています。信仰があると本人は主張しても、それは死んでいる。だから持っていては何の意味もない。何の役にも立たない。果たして私たちの信仰はどうでしょうか。私たちの信仰は行いを伴う信仰でしょうか。行いに現れ出る生きた信仰でしょうか。自分の信仰はどうなのか、このヤコブの言葉の前で点検させられたいと思います。

さらにヤコブは言葉を続けます。18 節：「さらに、こう言う人もあるでしょう。『あなたは信仰を持っているが、私は行いを持っています。行いのないあなたの信仰を、私に

見てください。私は、行いによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。』　ここは少し解釈が難しい箇所です。まず問題の一つは、ここである人の言葉が引用されていますが、その括弧はどこまでと考えたら良いのかという問題です。原文のギリシャ語には括弧の記号がないため、文脈から判断するしかありません。新改訳は 18 節の最後までを「 」の中の言葉としていますが、口語訳や新共同訳は 2 行目の「私は行いを持っています。」までとしています。後で触れますが、おそらくその方が正しいと考えられます。

そして二つ目の問題は、この「 」の中の言葉は誰の言葉かということです。ヤコブの賛同者か、それとも彼の反対者か。新改訳はヤコブと同じ立場の人の言葉と解釈しています。しかしその場合、不自然さがぬぐえません。なぜヤコブはここで匿名で自分と同じ意見を持つ人の言葉を引用したのか。それが誰であることを示さず、他の人もこう言っていますよ！と語って、自分の主張をより強固にしようとするやり方はフェアとは言えません。そして新改訳はそう訳していませんが、大事な事実は原文では 18 節最初に「しかし」という言葉があることです。口語訳や新共同訳はそれを入れて訳しています。ですから 18 節はヤコブが反対意見を取り上げているところなのです。これまで語って来たことに対して、「しかし、こう言う人もあるでしょう」と言って、その人たちの意見を考慮している部分なのです。その場合、新改訳のようにカッコを 18 節の終わりまで広げるとおかしいことになります。ヤコブの反対者たちが、自分たちは行いを持っていると主張することになるからです。そこで結論として多くの注解者が一番良いと見ているのは、反対者の言葉は 2 行目の「私は行いを持っています」という部分までであること、そしてその反対者たちの言葉の中の「あなた」とか「私」という言葉は、「ある人は」また「別の人は」という意味の会話的表現である、ということです。一例として口語訳聖書は 18 節前半をこう訳しています。「しかし、『ある人には信仰があり、またほかの人には行いがある。』と言う者があろう。」こう述べる人たちのポイントは何かと言うと、「信仰」と「行い」は神がそれぞれに与えた賜物の違いとして考えられるのではないかということです。たとえば I コリント 12 章には「同一の御霊が、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えて下さる」と記され、そのリストの中に「ある人には御霊による信仰が与えられ」とあります。またローマ書 12 章の賜物のリストには「分け与える人」とか「慈善を行なう人」と出てきます。このように「信仰」と「行い」は賜物の違いとして考えられるのではないか。「ある人には信仰、ある人には行い」という風に。なのにこの両方を持たなければ正しいクリスチャンとは言えないとするヤコブの主張

は行き過ぎなのではないかということです。

これに対し、ヤコブは 18 節後半で言います。では「行いのないあなたの信仰を、私に見せてください」と。そういう信仰があるなら、それがあつことを私に証明してみてくださいと。一方でヤコブは自分の側からは「私は行いによつて、私の信仰をあなたに見せてあげます。」と言います。これはまた随分とすごい言葉だと私たちは思うかもしれせん。私たちの中の誰かがこんな言葉を発したらえらい豪語したものだつ皆が驚き呆れてしまうことでしょうか。それよりはむしろ「私には人様に見せられるようなものはありません。私はさつぱり行いに現れてこないような小さな信仰の持ち主です。」と言つておいた方が、誰からも非難されず、かえつて謙遜な人だと賞賛されさえするつう感覚を私たちは持つているものです。しかしそれはヤコブの立場、そして聖書の立場とは違つます。もちろん私たちは地上にある限り、完全に到達することはありませんが、しかしもし信仰が本当にそこにあるなら、その実がそこに現れ始めていなければならぬ。主イエスを信じていますと言いつながら人をえこひいきしているようでは何かが間違つている。信仰は行いを伴う。むしろ行いがそこにあるかどうかによつて信仰が本当にそこにあるのかがどうかがテストされるつうことなのです。

最後の 19 節も反論に対する答えです。「行いのない信仰があるなら、それを示してください」と要求したヤコブに対して、ある人は、私にはそれができると思つていた。「私は素晴らしい信仰告白を述べることができる」とつうことです。私は正統的な教理をきちんと述べるることができる。深い神学的知識を持つている。このような真理を理路整然と語ることができるのは非凡な賜物であり、私の信仰が大いに実質あるものであることを示している。そんな彼らに対してヤコブは「あなたは、神はおひとりだと信じています。りつぱなことです。」と言います。この背景にあるのは申命記 6 章 4 節以降の「シエマ」と呼ばれる部分です。申命記 6 章 4 節は「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」と始まり、その最初の「聞きなさい」とつう言葉がヘブル語では「シエマ」となつています。ユダヤ人は毎日朝夕の 2 回、この部分を朗唱しました。その告白が「主はおひとりである」とつう告白をもつて始まります。ですからこれはユダヤ人が日々行なう信仰告白の全体を代表し、また象徴する言葉と言えます。

ヤコブはそれは「立派なことです」と言います。そして続けてこう言います。「ですが、悪霊どもも、そう信じて、身震いつています」と。これは反対者たちにとっては思

わぬ展開でしょう。正しい信仰告白が自分たちの信仰の真実さを証明すると思ったのですが、それなら悪霊もそうしているとヤコブは言います。確かに福音書を見ると、弟子たちよりも悪霊たちの方が正しい告白をしている記事が出て来ます。人々がまだそこまで目が開かれていない段階から、「いと高き神の子、イエス様」とか、「私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」などと言いました。しかし彼らはもちろん救われる者たちではありません。ここにも「身震いしている」とあります。やがて自分たちはさばかれることを確信しています。正しい真理を告白しているのに！つまり正しい教理の告白それ自体は、その人の救いを保証しない。教理を告白するだけで行いがそこに伴っていないなら、その状態は悪霊と同じかもしれない。

ある人はここにヤコブのさらに厳しい皮肉も込められていると見ます。一つは悪霊どもは神を知っている結果、少なくとも身震いするという姿を示している。その一方、あなたがたはそれさえも示していない。知っていることが生活に現れ出ているという点でまだ悪霊たちの方がましであるという皮肉です。またもう一つは、正しい知識を持つだけで行いのない悪霊たちが身震いしているように、あなたがたも自分たちの上にやがて臨むであろうさばきを思って、震え上がらなければならないのではないかという皮肉です。

さて私たちはどうでしょう。今日の御言葉から学ぶことは、私には信仰があるということだけではダメであるということです。それなら悪霊たちと何ら変わらない。問われなければならないのは、行いはそこにあるかということ。だからと言ってヤコブは信仰に行いを足しなさいと言っているわけではありません。信仰+行いで救われるのではありません。救いはただ信仰によります。しかしヤコブが言っているのは、信仰は必ず行いに現れ出るということです。行いのない信仰はない。そういうものは信仰ではない。もしそれを信仰と呼ぶなら、それは死んだ信仰、役に立たない信仰、実質のない信仰であるということです。真の信仰は、その人の生活に変革を与え、行いとなって現れ出る。いや現れ出ずにいないものである。先にも触れた通り地上にある限り、私たちの行いは不完全です。ですから完全な状態でなければ救われたとは言えないということではありません。しかし少なくとも信仰から出る真実な実が現れ始めていなければならない。生きた信仰があることの証拠が見られなければならない。この真理の前で私たちは自分の信仰を自己吟味するようと今日の箇所を招かれているのではないのでしょうか。

この御言葉の前で胸を張ることのできる人はいないと思います。私たちは皆、自分の貧しさを思うでしょう。そうであるなら私たちのすべきことは、良い行いを人間的な力で信仰に加えることではなく、いのちの源なる主イエス様に益々しっかりつながることでしょう。私たちの主であり、御国の王であるイエス様は、8節で見ましたように、私たちに對し、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という御言葉通りの歩みをしてくださいました。栄光の天を後にし、ご自身を卑しくして私たちと同じようになり、私たちのために尊いいのちまでもささげて私たちに救いを与えてくださいました。その方につながり、その救いを感謝しているなら、私たちもそのように生きたいと動かされずにはいないでしょう。自分がしていただいたように他の人にもしよう！という生き方へ導かれるはずです。自らの信仰を今一度振り返り、その信仰が行いに現れ出る信仰でありますように！形だけの死んだ信仰でないように！そのいのちを外に現す信仰でありますように！と祈り求めたいと思います。そして今ここで人々の役に立つ信仰、またかの日に究極的な意味で役に立つものであることが明らかにされる主にある信仰の祝福に生かされて行きたいと思います。